

留学を終えて

聖マリア女学院高等学校 若山 未胡（ニュージーランド）

私はニュージーランドの最大の都市であるオークランドに、2025年4月から翌年の4月まで正規留学をしていました。この1年間は、私にとって本当に貴重で、かけがえのない時間だったと感じています。私は、周りの目をととても気にしてしまう性格であり、日々多くのことを感じながら生活していました。自分の価値観や考え方を成長させたきっかけになったと思います。

出国当時、同じ高校からの友人2人と同じ飛行機に搭乗したのですが、ニュージーランドの天候の影響により2時間の遅延が発生しました。ニュージーランドの空港に到着後、ホストファミリー宅に向かいました。彼らは、とても温かく迎えてくれました。しかし後に、本来ホストファミリーに伝わっていた日にちより1週間も早く到着していたことが判明しました。経験豊富なホストファミリーは、突然訪問した私を受け入れていただきとても感謝しています。家庭には、同じ現地校に通う同い年の留学生2人がいました。その子たちとは、2025年11月まで一緒に生活して、とても良好な関係を築きました。その後、2026年1月からは年下の中国人とタイ人の子と過ごしました。

私は、Emily という英語名をホストファミリーに付けていただいたのですが、学校に同じ名前の生徒がたくさんおり、最終的には自分の名前で過ごしました。私のホストファミリーは60代のご夫婦であり、家事のお手伝いを積極的に行いました。洗濯やアイロンがけは各自で行い、食器洗いは留学生が担当するなど、生活の中で自立心や生活力を養うことができました。また、日々の家事を通して家族への感謝の気持ちを改めて実感する機会となりました。特に、疲れている日でも会話や歌を交えながら行った食器洗いの時間は、印象深い思い出となっています。

学校生活においては、12年生では英語、数学、料理、日本語、金融、幼児教育を、13年生では英語、ビジネス、会計、金融、幼児教育を取りました。当初は英語力の観点からビジネス系科目の履修が難しいと判断され、希望通りの選択ができませんでしたが、しばらくしてから履修する機会を得ることができました。実際に授業を受けてみると、現地生徒とのビジネス知識や経験の差を感じ、基礎的なビジネス用語の理解から始める必要があり、多くの困難がありました。しかし、友人や先生の支援により学びを継続することができ、短期間ながらもビジネス分野に触れる貴重な経験になりました。この経験は、将来の進路選択を考える上でとても意味のあるものであったと考えています。なお、单元テストの結果は満足のいくものではありませんでしたが、支えてくださった方々への感謝の気持ちは非常に大きいものがあります。また、幼児教育の授業を1年間履修し、この分野への関心が高まりました。実際に幼稚園を訪問した際には、現地の教育現場を肌で体験し、ニュージーランドにおける教育に関わることへの関心も芽生えました。

生活面においては、ホームシックになることはほとんどありませんでしたが、クリスマス前に家族が訪問してくれた後の1か月間は、日本を恋しく感じる時期もありました。さらに、現地校のプログラムを通じて、留学生向けの旅行に2回参加しました。1回目に訪れたロトルアでは、伝統的なマオリの食文化や舞踊に触れ、自然の温泉地を見学しました。これらの体験を通して、

日本とは異なる自然環境や文化の多様性を実感することができました。また、各プログラムにおいて多国籍の留学生と交流し、互いの言語や文化を学び合う機会を得ることができました。

一方で、反省点として、日常生活においてより積極的に英語を使用し、自ら話しかける姿勢や失敗を恐れない行動が十分ではなかったと感じています。また、部活動やボランティア活動に参加していなかったため、それらに積極的に取り組んでいれば、さらに多くの人々と出会い、交流を深めることができたと思うときもあります。

本留学を通して、多様な人々との出会いや日々の生活、様々な活動を通じて、新たな視点や価値観を得ることができました。これらの経験は、私の人生において他に代えることのできない素晴らしい思い出であると考えています。このような貴重な機会をいただいたことに、心より感謝申し上げます。